

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370375

研究課題名(和文) 第二次大戦期のシュルレアリスムにおける社会思想の形成 - 宗教性・共同体・愛の問題

研究課題名(英文) The formation of social ideas around the World War II and their problems :
religiosity, community and love

研究代表者

有馬 麻理亜 (ARIMA, Maria)

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：90594359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1940年代のテキストや講演を分析することによって、第二次世界大戦中から戦後にかけてアンドレ・ブルトンが一つの社会思想を構築していくことを示した。彼の思想の前提となっているのは、ある一つの精神のモデルである。それはロマン主義的理想主義を抱き、社会変革を目指す精神は文明への対抗として最終的に秘教を見出すというものであった。彼自身もまた、この精神の発展過程を経ているのであった。

一方、この時代に彼が取り組んだ神話の主題や善悪といった倫理的問題、さらに現実に参加した「世界合衆国」運動などにおいても、この特殊な世界観が反映されていることを証明した。

研究成果の概要(英文)： In this research, we showed Andre Breton conceptualized his ideal society after the WWII. The society he would like to realize is based on his idea of human mental development : Romantic idealism which could lead to a social revolution found its interest in occultism (Breton presented LEVI and Hugo's biographies as examples). As to Breton himself, his social ideas also followed this process of mental development.

We also examined and proved his activities around the WWII reflect his ideal society : the problems he showed (ethic, myths) and his participation in world citizenship movement.

研究分野：仏文学

キーワード：シュルレアリスム アンドレ・ブルトン 第二次世界大戦 社会思想

1. 研究開始当初の背景

(1) 源泉:

本研究に取り組むきっかけとなったのは、報告者がそれまで取り組んでいたアンドレ・ブルトンにおける「崇高点」の概念に関する研究成果であった。この概念は1937年、作品『狂気的愛』に登場したもので、先行研究ではブルトンが目指したあらゆる理想の象徴として扱われることが多かった。

報告者は、博士論文においてこの概念が30年代におけるアンドレ・ブルトンの思想を反映するものであることを示し、この時代のブルトン思想を«*idéalisation sans idéalisme*»「理想(観念論)なき理想化(観念化)」と定義したのだ。「崇高点」は、ブルトンによるロマン主義や暗黒小説受容によって、伝統的「崇高」の特徴も備えつつも、彼が30年代に発展させたオブジェ論と深く結びついていた。実際の山頂である「崇高点」は概念として極度に観念化(理想化)されている。この物質を換骨奪胎し、それを理想化(観念化)することで、物質と観念双方の性質を併せ持つ存在を創造するという、この«*idéalisation sans idéalisme*»という思考形式こそ、共産主義への接近と挫折、マルクス主義とヘーゲル哲学という矛盾した思想への愛着を母胎とし、観念論的と批判されたブルトンが当時模索していた「観念論と唯物論を乗り越える」ための一つの解決策であった。

(2) 新たな問題から本研究課題へ:

この研究成果を踏まえて、報告者は第二次世界大戦期の文学における理想主義の受容とその多様な形態に関心を抱いた。特にファシズムや戦争といった、作家の倫理が問われる第二次世界大戦期にそれがどのように表れるのかを新たな課題とし、研究に取り組んだ。その結果、報告者はファシズムの台頭期にアンドレ・ブルトンとジョルジュ・バタイユが短い期間であるが共闘した「コントロール=アタック」に着目することとなる。この時期、両者が共通して抱いていた関心はフロイトとマルクス思想の受容であった。そこで、報告者は同時代人で同じくファシズムの危険性を察知し、フロイトとマルクスの融合を図ったウィルヘルム・ライヒを加えて、三者を比較した。その結果、理想主義的傾向とフロイト=マルクス主義の受容に関係があること、さらに3人が戦後「聖なるもの」(バタイユ)「オレゴンエネルギー」(ライヒ)、秘教(ブルトン)といった、ある種の神秘性へと傾倒していくという共通点を発見した。この方向性こそが、戦争やファシズムを生みだした文明に対抗するモデルなのではないかと報告者は考えた。

2. 研究の目的

以上の過程を経て、報告者は本研究の主題を構想することとなる。その主題とは、第二次大戦期から戦後にかけてシュルレアリス

ムが示した傾向のうち、特に倫理的関心(愛、理想的共同体、善や悪といった概念)と魔術や秘教といった宗教性への接近に着目して、その思想的・歴史的背景と相関的に分析することである。さらに、この分析によって、この時期のシュルレアリスムが一つの社会思想を形成していく過程を示すことである。最終的には、これらの成果を踏まえて、ブルトンが戦後にかけて構築していく社会思想が既存の文明というものに対して提示された、戦後シュルレアリスムの反抗のモデル(あるいは対抗文化)であったことを証明したいと考えるにいたった。

そこで、この最終目標に到達するために本研究では問題体系を三つの主題に分類し、順次取り組むこととした。その主題は次のとおりである。

- ・主題1: 1930-1940年代における、シュルレアリスムの宗教性(神秘主義的なものを含む)への接近
- ・主題2: 1940年代における倫理的問題の浮上と社会思想の形成
- ・主題3: 反文明的モデルとしての社会思想—他の作家との関係

3. 研究の方法

上記の三つの主題に取り組むことによって、報告者は第二次大戦期から戦後にかけてシュルレアリスムが独自の社会思想を形成していく過程を明らかにしようとした。そして各々の主題について、次の研究方法を採用することとした。

・主題 について: 当時の政治的・思想的背景を考慮しつつ、神秘主義に対するブルトンの問題意識の発展を時系列に分析し、戦後のシュルレアリスムが宗教性へ接近していく過程を示す。

・主題 について: 1940年代ブルトンが提示した倫理的問題(愛、共同体、善悪など)と、示した宗教性への接近との関係を明らかにする。

・主題 について: との結果を踏まえて、ブルトンが戦中・戦後に形成していった独自の社会思想が、既存の文明に対する反抗の形態であることを証明する。また、同時代作家において同様の傾向があるかを調査する。

4. 研究成果

(1)平成26年度

当該年度においては、本課題の問題体系を整理することが目標であった。その成果として論文「再生の神話」から新たな社会思想の構築へ: 第二次世界大戦期におけるアンドレ・ブルトンの進化」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』、第5巻、

平成26年7月)を発表した。この論文では、第二次大戦前後におけるブルトン思想の特徴を定義するだけでなく、当時彼が関心を抱いた主題を神話と倫理的問題に関するものに分類し、その相互的影響を分析したものである。この論文を通じて、この二つの主題が秘教にある善悪の構造と密接に関係があることを示すことができた。

一方、本研究課題の基盤となる問題、すなわち1930年代におけるブルトン思想と、その後彼が関心を抱いた神秘主義との関係について論じた論文(「共鳴とすれ違い「コントロール=アタック」前後のブルトン、バタイユそしてライヒ」、『バタイユとその友たち』、共著、水声社、平成26年7月)が刊行された。

さらに、京都産業大学長谷川晶子氏と山形大学合田陽祐氏とともに、関西圏のシュルレアリスム研究者、及び他分野の研究者間の交流と、各自の研究視点を多様化することを目的とした「関西シュルレアリスム研究会」を立ち上げた。この研究会は現在でも定期的に運営されており、研究発表会、シンポジウム、勉強会などを中心に活動している(活動内容は後述のHPで参照可能)。

(2)平成27年度

当該年度においては、シュルレアリスムにおける宗教性への接近と、第二次世界大戦期にブルトンが構築する社会思想との関係を検討することとなった。

まずは前述した関西シュルレアリスム研究会の第3回研究会で発表を行なった(「第二次世界大戦前後のアンドレ・ブルトンの思想-「政治的理想化」とフーリエ」、平成27年5月10日近畿大学)。この発表では、1930年代から構築されたブルトンの思想形態「観念論なき理想主義」が、戦争を通じて「政治的理想化」へと移行すること。さらにその「政治的理想化」とブルトンにおけるシャルル・フーリエに対する関心が繋がっていることを示した。

次に、ブルトンが第二次世界大戦後にハイチで行なった講演を分析し、論文として発表した(「社会主義の夢 *rêve du socialisme*」:戦後におけるブルトンの文芸批評とロマン主義再興、近畿大学教養・外国語教育センター紀要、第6巻第1号、2015年7月)。この論文では、ロマン主義文学を通じて、ブルトンがフーリエやサン=シモンといった社会思想家と、神秘学思想家エリファス・レヴィや彼に影響を受けたヴィクトル・ユゴーらをも一つの精神の系譜として捉えていることを提示した。さらに、戦後のブルトン思想にはある一つの精神の発展段階が想定されていることを明らかにした。それは社会変革を求める理想主義思想が神秘主義へと接近する精神の発展モデルによるものである。

一方、ブルトンとは政治的・思想的立場の異なるものの、神秘主義を取り上げている作

家であるジョルジュ・バタイユとの関係に関して発表した。「コントロール・アタック」のバタイユとブルトン、そしてシュルレアリスム彼らの共同作業についてともに再考すること」と題されたワークショップにおいて、報告者は「コントロール=アタック以後のブルトンとバタイユ」という題のもと、40年代以降のブルトンとバタイユの交流を取り上げた(2015年11月1日於京都大学)。この発表を通じて、しばしば対立したと考えられるブルトンとバタイユが戦中だけでなく、戦後においても直接的かつ間接的な交流を続けていたことを証明した。

(3)平成28年度:

最終年度の目的は、戦後にむけて構築されていくシュルレアリスムの社会思想を明らかにすること、またブルトンが提示した倫理的諸問題と宗教性との結びつきを示しつつ、可能であれば同時代の作家と比較することであった。

そこで、まずは戦後におけるブルトンが行った政治活動、すなわち「世界合衆国」設立に向けた講演等の分析により、彼がいかなる理想的社会像を抱いていたのかを明らかにした。さらにこの活動に着目していた同時代人であるバタイユの考えとの比較・対照を行った(「第二次世界大戦後の一挿話『世界合衆国』- -ブルトンとバタイユの場合」、『三田文学』、査読無、95巻、127号、2016年11月、pp.307-311)。

次に、戦後発表されたブルトンの詩論である『上昇記号』の詳細な分析によって、戦後のブルトン思想の中核となる倫理的問題が詩的イメージ論や神話といった、戦中・戦後に重要度を増していく主題に影響を与えていることを示した(「戦後のブルトン思想と「上昇記号」:シュルレアリスムにおける直観的モラル」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』、査読有、7巻(2)、2016年11月、pp.19-38)。

また、前年に発表した、ブルトンのハイチ講演に関する論文の成果から、報告者はピエール・マビーユが1930年代から戦後にかけてブルトンに少なからず影響を与えていることを発見した。そこで当該年度、マビーユに関する調査をフランスで行った。この成果は平成29年度中に報告する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

有馬麻理亜、「戦後のブルトン思想と「上昇記号」:シュルレアリスムにおける直観的モラル」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』、査読有、7巻(2)、2016、19-38

有馬麻理亜、「第二次世界大戦後の一挿話『世界合衆国』 プルトンとバタイユの場合」、『三田文学』、査読無し、95巻 127号、2016、307-311

有馬麻理亜、「コントロール=アタック以後のプルトンとバタイユ」、『Cahier』、査読無し、17号、2016、12-13(ワークショップ報告、申請者担当部分)

有馬麻理亜、「『社会主義の夢 rêve du socialisme』:戦後におけるプルトンの文芸批評とロマン主義再興」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』、査読有り、6巻(1)、2015、1-17

有馬麻理亜、「『再生の神話』から新たな社会思想の構築へ:第二次世界大戦期におけるアンドレ・プルトンの進化」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』、査読有り、5巻(1)、2014、37-53

有馬麻理亜、「共鳴とすれ違い「コントロール・アタック」前後のプルトン、バタイユそしてライヒ」、『バタイユとその友たち』、査読無し、2014、165-179

有馬麻理亜、「コース『開幕からの決裂』評」、『バタイユとその友たち』、査読無し、2014、82-87(訳・注・付記)

〔学会発表〕(計2件)

(学会におけるワークショップでの発表) 有馬麻理亜、「コントロール=アタック以後のプルトンとバタイユ」(ワークショップ「コントロール・アタック」のバタイユとプルトン、そしてシュルレアリスム—彼らの共同作業についてともに再考すること)、日本フランス語フランス文学会秋季大会、京都大学(京都府、京都市)、2015年11月1日

(研究会における発表) 有馬麻理亜、「第二次世界大戦前後のアンドレ・プルトンの思想—「政治的理想化」とフォーリエ」、『第3回関西シュルレアリスム研究会、近畿大学(大阪府、東大阪市)』、2014年5月10日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：

<https://www.facebook.com/surrealismek/>
2015年2月に立ち上げた関西シュルレアリスム研究会のサイト。発起人は報告者の他、京都産業大学長谷川晶子氏、山形大学合田陽祐氏で構成される。サイトは長谷川氏と報告者による共同管理。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有馬 麻理亜 (ARIMA, Maria)

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：90594359

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし